

ぎんれいゆ会

平成二十八年十一月

秋深む名札なき樹の名も尋ね

主宰 細野恵久 福祉三期

立冬や地熱の残る使い水

増田和子 食文一期

帯固く締めて序の舞秋惜しむ

改正節夫 国際三期

時雨るるや丹波の陶の黒き艶

藤井秀重 生環四期

汐木燃す夕日の浜辺冬来る

三枝邦光 美工五期

秋冷や法話の僧も茶を啜る

國永靖子 音文六期

帰り花骨格残す明石象

猿橋二三雄 福祉八期

遠縁の喪中はがきで冬に入る

加藤善巳 美工八期

秋爽や老女小町を謡ひ終ふ

太田 實 国際十期

鈴の音も菊の香りも絵手紙に

今崎良平 音文十四期

連雀や朝の紅茶を注たして

大下絹子 国際十五期

バス停を横目に過ごす秋日和

中村建生 国際十五期

吉祥草咲き恙なき日なりけり

藤本武子 国際十五期

吊るし柿古民家の軒風通る

山下 進 国際十五期

秋夕陽柱状節理の影深し

許斐國照 食文十五期

小春日や琵琶湖眼下に八幡山

小淵政子 健福十六期

スウイングジャズすり鉢あたるとろろ汁

水島麗子 国際十六期

抱き上ぐる子に大枯野匂ひけり

兼清久子 健福十七期

朝寒や杖の出番はないのかな

宮本公子 健福十七期

父語り相槌百遍相炬燵

沖本无辺子 国際十七期

とびきりの空へ口開け石榴の実

香春早苗 国際十七期

秋の蝶風に小翅を委ねをり

仲田慎輔 国際十七期

秋時雨シャンソン流しあずき煮る

中村富美子 国際十七期

奥飛驒へトンネルあまた谷紅葉

宮本眞貴子 国際十七期

行く秋の雲の速さや通り雨

江間れい子 園芸十七期

赤信号何処吹く風の神の鹿

小栗恭子 健福十八期

遣唐使の苦難の海や鷹渡る

潮江敏弘 健福十八期

妻恋の想い一声鹿ぞ鳴く

野見山剛 健福十八期

落葉にも活きる道ありプランタン

大山吉春 国際十八期

生き急くなよと海鼠の独り言

今井義和 美工二十期

ぎんれい句会について

ぎんれい句会は、シルバークレッジ第一期生として在学中だった俳誌「ぐるっけ」主宰品川鈴子先生に俳句の手ほどきを受けた同期生が卒業後すぐ平成九年四月に立上げた句会で、その後次々に同窓の俳句愛好者を加えて今日まで月一回の句会を続けてきました。

鈴子先生には引き続きご指導を賜りましたが、平成十五年からは第三期生で「ぐるっけ」同人会長の細野恵久先輩が代って指導を引き受けておられます。

その間、平成十八年に第百回記念の、また平成二十六年には第百回記念の合同句集を発行、句会の足どりをささやかながら形として残しました。

なお今回ご紹介する作品は第二百三十一回の句会からの一人一句です。